

# 仏花を生けてみましょう

ご家庭におけるお内仏の、仏花の生け方を紹介します。写真で紹介している花材は、あくまで一例ですので、身近なお花や草木を用いて生けてみましょう。

**1** 花瓶の中心よりやや後ろに、松や檜などの真(心)を挿し、その後ろに檜などの下草を入れます。



**2** 真の前にあしらひとして、リアトリスと松を生けます。



**3** 真の前に輪菊(大菊)を1本、その前にスプレー菊(西洋菊)を3、4本挿します。



**4** 菊の周りに檜葉を入れ、最後に小菊で足元を整えて完成です。



仏花はお浄土の清浄なる世界をあらわしています。

仏花は、仏さまにお上げするものではなく、

仏さまのおこころと世界をあらわすために、私たちのほうに向けて荘厳します。

## 「死に方上手」のすすめ 生き方上手につなげて

社会福祉法人「同和園」付属診療所長 中村仁一さん

特別講演会「『死に方上手』のすすめ」の講師を務める、医師で京都市の社会福祉法人「同和園」付属診療所長の中村仁一さんは「人間には穏やかに死ねる仕組みが備わっているのに、過剰な医療や介護がそれを妨げている」と指摘する。

同和園は特別養護老人ホームと養護老人ホームを運営しており、中村さんは二〇〇〇年に赴任してから五百人以上をみとってきた。

「老人が自分で飲み食いしなくなったたら寿命なんです。死ぬ時が来たから、もう必要ないからそうなったのに、飲食しないから死ぬと思ひ込む人が多い」。結果として、病院なら点滴や栄養チューブ、介護施設なら長時間かけての食事の無理強いが行われ、自然死を妨げ本人に苦痛を与えているという。

「現代の日本には医療への過大な期待がまん延している」とも。「生まれたらやがては死ぬんです。安らかに死んでいく様子を家族に見せ、死が怖いものではないと教えるのが年寄りの最後の義務。医者も家族に自然死に至る過程を事前に説明して心構えをさせなければなりません」

死ぬことと関連して、中村さんは、生老病死を「苦」「思い通りにならないもの」と説く仏教の教えを、日本人はもっと日常生活に生かすべきだと訴える。

「仏教の『あきらめる』は『明らめる』、つまり物事をはっきりさせるという意味です。老いや死は人間にはどうにもならないものと受容し、その上で生をいかに充実させていくかを考えるべきだという。

「古くなったらあちこち傷んでくるのは当たり前。私は今、七十七歳で立ったままズボンをはくことができなくなっていますが、そうならた座ってはほしいんです。死ぬまであるがままに生きていけばいいんで、『死に方上手』は『生き方上手』につながります」